

通が発達したとはいえ、ローカル線の不便さ、また1週5日制の官庁、県から村へ接近する手続のために結局5つの県をまわるにとどまった。すなわちガーラシン、マハーサーラカーム、ローイエット、ウボン、スリンの県である。

2 ガーラシン

バンコクからコーンケンまでの約450キロは、コーラートからノンカイにいたるフレンドシップ・ロードの舗装が完成したため非常に便利で、大型長距離バス・バンツで8時間半余りにすぎない。コーンケンからガーラシンまではオーストラリアの技術援助によるアスファルト舗装が敷かれつつあり、今年度中には完成の予定だという。交通機関としてはバスの他、乗合タクシーの便があり、比較的安い。コーンケンからガーラシンまで76キロ、1人15バツである。

このフィーダー・ロードの伸展にともない、ガーラシンの西半分はコーンケンの市場圏内に入りつつある。ヤーグッタラードからはコーンケンに買物に来るし、コーンケンからはケナフの仲買者が入りこむ。今年は不作のため未成熟のケナフを売る農民が多い。カーイ・ポー・キオといい、青田売りならず、青畑売りである。1年のうちでも8月は経済的に苦しく、ケナフはまだ青い。商人は1ライの収穫200キロとみこんで、100キロ分の金額を収穫期の値で買う。刈入れ、レッティングには農民を雇うが、出来高制で、レッティングの終わったケナフ4束につき1バツを支払う。そのほかサイ・ポオ・キオといって青畑を抵当に入れて金を借りる方法も多い。この場合レッティングまでの作業は農民もちである。泥棒は多く、80キロの大束が少しの間に消え失せるから、農民はたいてい出小屋で泊って番をするし、商人は防衛のためにピストルを所持する。

ガーラシンはパーウ州の流域にあり、6郡39村からなる小さな県である。総面積7,621平方キロ、総人口426,795人のうち農業人口は396,051人(93%)、1平方キロ当りの人口は56人、密度の低いウドンターニーへの移動が目につく。住民のほとんどはラオタイで、18世紀後半ビエンチャンから移住してきたらしい。

ガーラシンは昔から経済的にあまり豊かでなく、財政上の理由から隣のマハーサーラカームと合併したこ

ともあった。町の人口は11,054人、コーンケンの半分以下、商店の数も少なく、夜9時になるとひっそりとする。町が小さくなるにしたがって華僑色もうすれる。ガーラシンには華僑の学校はないし、また商店に漢字を使う割合も少なくなる。しかし商人のほとんどが華僑であることにはまちがいない。町には廟があるし、最近開いたガーラシン第一のホテルの経営者はハーフ・チャイニーズだし、町の中で第一の金持はやはり華僑であり、ナム・パーウ・ダム建設後の地価の上昇を見こして最近10,000ライの土地を買占めたのもかれである。

12月10日は憲法発布記念日であるが、タマサート・デイと称して、タマサート大学の同窓生が集まり、各県で催しがひらかれる。ただし、これは大学の創設者プリディーとは関係なく、親睦会にすぎない。その会でクチナーライとヤーグッタラードの郡長、その他

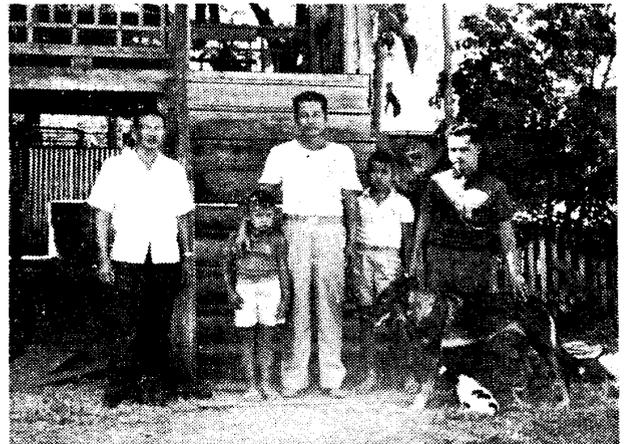


写真1 ヤーグッタラードの郡長(中央)

農村開発作業員と知り合い、2つの郡の村をみることにきめる。ついでながら、純粹のタイ人とはなにかと時々思わざるをえぬことにぶつかる。ヤーグッタラードの郡長は生肉こそ食わぬが、この土地で育った人である。しかし祖母は中国から来たという。

両郡とも農村開発地域に指定されており、作業員がはいりこんでいる。町自体は両者とも人口2,000~3,000、商店の数も20~30軒、旅館もない田舎町である。ヤーグッタラードはコーンケンに近いが、クチナーライはガーラシンの県庁所在地からさらに80キロ東北にあり、新聞もその日のうちには到着しない。市場から遠いためクチナーライでは換金作物の作付面積も少なく、現金収入も少ない。開発がおくられてい

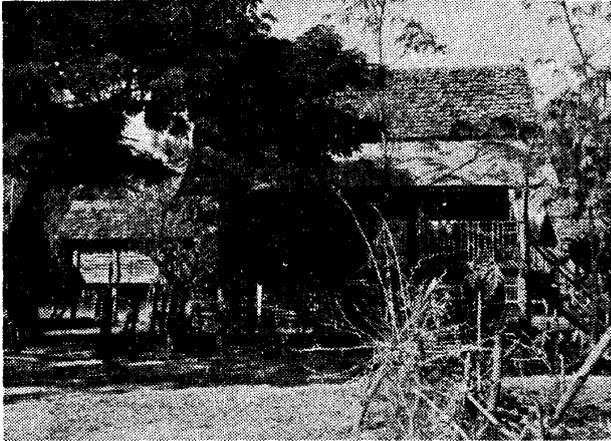


写真2 木で葺いた屋根

る証拠に、未だ開拓の余地があるし、また農民の所有する農地の90%は単に管理権にとどまるノー・ソー・サムである。

クチナーライにはトタン屋根が少なく、木で葺いた屋根が多く、また傾斜もきつい。山ぎわなので雨が比較的多いのだろうか。事実東北一带早魃だというのに、ここは稲の出来がわるくない。もっとも、それは単なる様式の問題なのかもしれない。住民のほとんどはプータイである。言葉はラオタイと類似しているが、異なるところもある。「なにををしているか」というのにラオタイはヘッド・ヤングといい、プータイはヘット・ペルーという。両族とも男が娘の家を訪れる風習がみいだされる。ラオタイはこの慣習をレン・サーウといい、プータイはイェン・サーウという。プータイの娘はラオタイよりずっと色が白く、肌が美しく、鼻の格好もよい。娘はより優雅で、訪れると、まずマットと水を持ってもてなし、部屋にひきさがって身をやつす。ラオタイと著しく異なる点は、男は結婚後妻の両親の家に住むのではなく、自分で家を建てて妻と住むし、また水田は父から息子に受継がれるのを常とし、娘にはやらぬことである。なおプータイの村にはたいてい4つか5つの有力な氏族があると報告されている。

プータイはクチナーライをはじめ、山をへだてた北の県ナコーンパノムとサコーンナコーンに住み、その数は約70,000人と推定されている。しかしこの民族の大部分はメコン川の東側に居住している。クチナーライのプータイの中には、ことに山麓のグチムグムガウには共産ゲリラに荷担する者があると噂され、農

村開発作業員を恐れさせている。クチナーライはセンシティブ・エアリアのちょうど裏側にあるため、開発ことに道路の建設に力がいれられている。すなわち農村開発作業員の村落への浸透のほか、軍の移動開発隊、内務省の村落開発促進隊があって、クチナーライからムクダハーンへの道路建設を急いでいる。

3 マハーサーラカム

ガーラシンを朝7時にたち、途中でバスを乗りかえてマハーサーラカムの町についたのは午後2時、130キロ余りだが時間がかかる。ホテルに飛込んで水を浴び、急いで県庁に向う。途中はアスファルトで舗装していないから、砂埃でシャツの襟や肩は真赤になる。口をすすがないと水を飲む気もしない。

マハーサーラカムは高原の中央、ラムチー川のあたりにあり、7郡52村の県である。総面積5,625平方キロのうち耕地面積2,495平方キロ、総人口499,373人のうち農業人口は459,476人(92%)である。1平方キロ当りの人口は87人で、人口密度は東北第1、他県への移動がはげしい。チー川流域の住民はほとんどラオタイ、コーンケーンの調査部落でおなじみの顔付に出くわす。

町の人口は15,680人、商店の数も700~1,000軒くらいとなり、やや町らしい。昨年度の県の収入は約5,000,000バーツ、ガーラシンの1,500,000バーツに比して約3倍弱を示す。しかし県の西の方はやはりコーンケーンの市場圏内にはいる。県庁所在地の町は行政的にはミュニシパリティとされ、都市には違いないが、農村人口はかなり多い。マハーサーラカムの町の70%は農民であり、15%が商人、15%が役人であるといわれる。それでも田舎の郡役所所在地の町に比べると農村人口はずっと少ない。さきのクチナーライの町では農民95%、3%が商人、2%が役人だといわれている。

以前、石井助教授にカッハボディーという言葉を教えてもらったことがある。タイ・中国語辞典をみると「男家長」と訳されている。土地の人に聞くと非常に裕福で、寝て暮らせることのできるような身分の人だという。結局、それが歴史的にどういふものかをつきとめずに終わってしまった。マハーサーラカムのカッハボディーは誰かと尋ねると10人挙げてくれた。第1位と第2位はともに父が中国人、母はタイ人で、30年

ほど前に中部からこの地方に進出し、現在はモーターサイクル、薬、家財道具を取扱っている。税金の高は年7~80,000バーツである。第3位と第4位も同じくハーフ・チャイニーズで、同じころこの町に到来し、衣類、薬、家具を商っている。第5位、第6位、第7位はタイ人であり、地方貴族の子孫であり、広い土地と家を所持している。貸間数は200~300位という。第8位、第9位はタイ人で食料品店を営んでいる。第10位は両親ともにベトナム人であり、50~60ライの土地を持ち、肉を商う。以上のうち第3位は市議員に選ばれている。精米所やケナフ工場の所有者などが数えられないのはどういうわけだろうか。カッハポディーも田舎の町に行くほど影がうすくなるのは当然である。

今年はどこを歩いてみても旱魃による不作で、水不足の悩みを聞かされた。籾米の1タン(20リットル)昨年8バーツであったのが、今年は12バーツ。しかし売れる米はない。白米は1タンにつき昨年30バーツであったのが、今年は50バーツもする。ケナフはレットティング用の水がなく、刈取ったまま立てかけてある。河川のごく近くはポンプ給水で少しは助かるが、あとは全滅である。タンクと称する水溜も雨が降らなくてはなんともいたしかたはないし、セメントでかためてないから水漏りがする。それに規模の点からいってもとうていおっつかない。したがって青畑売りが当然余儀なくされるわけで、マハーサーラカームでは60%の農家が青いケナフを売っただろうと副知事はいう。しかしこれは少し多すぎる。見てまわった村からすると10%位のはずである。もっともこうしたことは時間をかけて詳細に調べてみないとわからない。

マハーサーラカームでは、県庁所在地の郡下の村を2,3訪れた。東北はどの村も白けた感じがして、時々やりきれぬ思いがする。しかし、ここでは婚姻、相続の慣習、農地所有の形態にかんしてコーンケーンの調査部落と同じであることがわかり、意を強くした。村の小学校の先生は現在30ライの土地を所有する。そのうち15ライは自分で買ったものであり、15ライは妻の両親から譲りうけている。妻には3人の姉妹と2人の兄弟がある、兄弟のうち1人は兵隊、1人は教員で、土地は譲り受けていない。姉2人はそれぞれ5,6ライの土地をもらった。末の妹は今両親とともに暮しており、この家族は50ライの土地をもつ。この50ライは

末の妹が受け継ぐことになるが、母の姉の孫娘に一部をわけられるかもしれぬという。したがって水田は娘達の間に分けられる傾向がみられる。家屋の配置の一例をあげると、中心に両親と末娘夫婦の家があり、その周囲に姉娘3人の家族がそれぞれ家屋を建てている。娘達の間には農地を平等にわけたという。ただこの例では息子夫婦1組も近くに小さな家を立て、また農地の分割にあずかっている。分割の時期は結婚後しばらくしてからであるという。

そうしてみると実際に分割されるまでの間、家屋を別にしながら、田畑を同じくする両親と娘夫婦のグループがあるはずである。このグループに名はないが、「ヘッド・ナム・カン」すなわち同じ田畑で生活している家屋の集り、といえはすぐ通じる。最初の村は戸数が多く、116軒、短時間の間に統計をとることは不可能だったが、少なくとも2例はすぐみいだせた。最後にまわった村は戸数20軒、ここではヘッド・ナム・カンのグループが2例あり、1組は両親と娘夫婦2軒、他の1組は両親と娘夫婦3軒、計7軒となる。残りの13軒はそれぞれ独立した家族である。ただしそのうち3軒は農地を全くもたない。かれらは村長である叔父の田畑を無償で借り、生活している。このような場合、土地の所有者をチャウ・コーグウ・ナ・リヤングという。

4 ローイエット

マハーサーラカームからローイエットまではバスで1時間である。バンコクからウボンに至る主要幹線が県の中央を東西に走るがアスファルト舗装はまだここまで伸びていない。

ローイエットはやはりラム・チー川のほとりにあり、人口密度はマハーサーラカームについて東北第2位である。総面積7,988平方キロのうち耕地面積3,098平方キロ、総人口668,193人のうち農業人口は620,665人(93%)である。1平方キロあたりの人口は87人で、他県への移動が目につく。マハーサーラカーム、ローイエットはともに東北でも最もよく開拓されているところであるが、土地所有の法的形態をみるとチャノードはほとんどなく、管理権にとどまるソー・コー・マンクおよびノー・ソー・ソーグウが約50%、売買権を認められているノー・ソー・サームが約50%を占め、土地整理がまだ十分には進んでいないことがしら

れる。

ローイエットでは村落開発作業員の世話で、タワットブリー県の村をみることにした。実際こうした作業員がなければ1人で村に入ることは不可能である。現在タイ全国で村落開拓地区に指定されている郡は48, そのうち東北が33郡, 南部が11郡, その他の地域はわずか4郡であり, 東北にかなりのウェイトがおかれていることが知られる。各郡には約30名の作業員が派遣されているが, その出身地区はまちまちである。だいたい半数は東北出身, 半数は中部その他であろう。東北と中部では言語, 食習慣がことなるため, 中部出身のものはしばしばマルアジアストメントをひきおこしやすい。役人意識に加えて中部出身の優越感をもって村人に接するから, 最初から失敗する。自己の地位の高さを誇示し, 相手を軽蔑するものは村人から信頼される人とはなりえない。かれはその地位の故に外面的な尊敬を受けることはできるが, 恐れられるのみである。村人はこうした人に対して本当のことはいわない。したがって調査村を選ぶ場合, 作業員の性格が非常に大きな要素になる。今になってみれば, この点昨年度の調査地の作業員, 通訳ともに申し分なかったと思う。したがってインタビューの結果にもそれだけ多くの信頼度をおくことができる。

村落開発隊の本部は内務省の村落開発局にあり, 東北部のセンターはウボンに, 南部のセンターはヤラーにおかれており, それぞれその地域の開発にたいして技術援助をおこなっている。作業員の実際の仕事は各村によってことなるが, 幹線から村への道路建設, 垣根や便所の普及, 給水設備, 小規模のダム工事, 養蚕の普及, 換金作物の普及などであり, 村人の自主性を尊重しつつこれらの仕事を通じて, 村人と政府の間関係を良好にすることが主要な目的となっている。開発に際しての悩みの種は村が貧しいことであろう。便所の設備には1軒100パーツはある。道路拡張にはトラクターをやとわねばならぬが, 1軒20パーツの金がなかなか集まらない。金を集めるには村人の信仰心に関する方法がある。ある村では給水タンクを寺の境内に設けたが, 20,000パーツは政府の予算から, 残りの20,000パーツは村人の寄付による。寄付は1軒4パーツをつのり, 不足分はタンブン・ガチンときに寄進した金をふりあてたという。またある村では, 道路拡張の援助金は寺の講堂を新築するのにまわし,

そのかわり道路工事は村人があつまって労力を出し合っている。いずれの場合においても, 寺の住職がリーダーシップを発揮し, 村人の信仰心にうたえて結束に成功している。道路の必要性を感じても, ことそれが金の問題となると協力しにくい。それほど農村は貧しい。

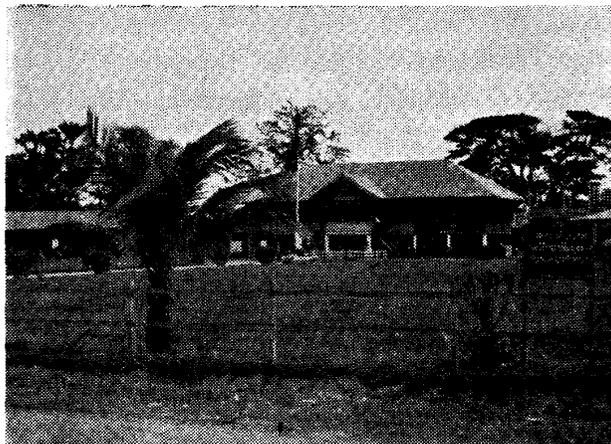


写真3 タワットブリーの郡役所

農民はみな貧しい。早魃で不作の年も多い。だいたいどの村でも3%~10%は両親の土地にも依存せず, 自分でも土地を持たぬ家族があると思われる。かれらは売るべき青いケナフもない。タワットブリーで町の近くの村を訪れた。戸数は29軒でうち4軒は2組のヘッド・ナム・カンのグループをつくっている。村内の土地所有の最高は村長で100ライを所持し, 娘夫婦とともに小作人を雇って耕作している。農地所有の最低は10ライ。全くないものが4軒ある。そのうち1軒は小作である。水牛は自分で所有し, 粃種も自分でまかなう。収穫の15%を所有者に納めるが, 普通は小作料は50%である。他の1軒は農業労働者で, 4人暮らし, 1年に70タンの米を受けとるから, それでまかなえる。他の1軒は女手1人の4人暮らし, 娘をバンコクに働きに出し, 4月に1回米代を送らせて生活している。最後の1軒は7人暮らし, 農業労働者である。生活に困れば村人に物を乞うて, なんとか食いつないでいる。ガーランソンで訪れた村の戸数は510軒, そのうち50~100ライの所有者100軒, 20~50ライが300軒, 8~20ライが100軒, 全くないもの10軒となっている。土地のないものは米代をかせぐのに走りまわらなければならない。時にはアヒルを飼って卵をうる。時には

魚を捕って売りあるく。ときには仲買人のようなことをする。資金がないから安定した仲買人ではなくて、使い走りに近い。ある者が田の魚を売りたい場合、その相手を見つけるのに飛び歩いて、手数料をもらう。こうした方法をイャブ・タウ・カーイといって村の中には割合多い。

ローエットではタワットブリーから東北へ80キロあまりのところにあるポントーング郡を訪れた。ここはちょうどガーラシンのクチナーライ郡の南側にあたり、山がちの郡である。新聞は2、3日おくれて到着する。ここにはまだ村落開発作業員は入っていない。そういうところにはまず内務省の村落開発促進隊が送られ、文字通り道を開く。ポントーングでは、促進隊とアメリカの建設部隊とが協力して郡役所所在地から東へ30キロの道路工事に着手しはじめていた。予算は5,000,000 バーツで期間は1年である。この道路が出来れば、クチナーライやムクダハーンへの交通がより便利になるはずである。今は道らしい道はなく、バスが通るどころか、牛車がやっと通れる程度である。

5 ウボンラーチャターニー

ポントーングを南に30キロ下って、セーラブームからウボン行きのバスに乗る。ウボンまで140キロの道路はまだ完全に舗装されていない。相変らずラテライトの赤土が続く。

ウボンラーチャターニーは東北諸県の中でも一番広い。ムーン川とチー川の合流点にあり、18郡193村からなる。総面積22,614平方キロ、総人口1,130,712人のうち農業人口は990,029人(88%)、1平方キロ当りの人口は50人である。

ウボンの町の人口は27,092人。町の人口構成はマハーサーラカムとだいたい同じであろう。商店のほとんどが中国人ないしハーフ・チャイニーズであることはいうまでもない。純粋のタイ人は5%にも及ばず、そのほとんどは小売店である。ハーフ・チャイニーズはタイの国籍をもつし、中には漢字の読めぬものもあり、文化様式としてはタイ化しつつある。しかし経済的利害ということになると中国人と同一視する。顧客に対してはタイ人として通用し、経済界においては中国人として通用する。タイ人とハーフ・チャイニーズの小売店を比較すると、ハーフ・チャイニーズの方が

有利である。品物を安く仕入れることが出来るし、安く売ることが出来るからである。客は安い店に集まる。純粋であろうとハーフ・ブラッドであろうと華僑は華僑として一つのカテゴリーであり、純粋のタイ人による商業の発展をさまたげていることはやはり事実であろう。タイ人の中にも店を経営するものはあるし、村の中でさえ小型の精米所を経営する者もあり、また仲買人として生計をたてるものもある。しかしかれらが町に出て華僑と競争することはできない。子供の職業として役人、警察官、先生を望む理由もこうしたところにあるのであろう。

ウボンラーチャターニーではメコン川の見えるケマラート郡とスウェイ族がいるといわれるデッドウドム郡の村を見ることにきめる。ケマラートはウボンから70キロ北に上り、右折して80キロ東に進んだところにある。1日2回バスの便があり、所要時間は4時間半、ラテライトの道路が低い山を通りぬけてメコン川岸まで達している。町に着いたのは夕方5時半、郡の教育部長の家を見つけて世話になることにする。

郡役所所在地の町は人口3,662人、店の数は50軒ばかり、税金は年7,453バーツというから、全くの田舎町である。郡役所の役人が32人、先生が250人、警官30人、それに加えて国境警察官40人と軍の移動開発隊が80人ばかり、その他わずかの商人をのぞくとすべて農民である。田畑の90%位が管理権にとどまるソー・コー・ヌンがないしノー・ソー・ソーグゥに属することはクチナーライの場合と同じである。

郡役所はメコン川の河岸にあり、小さいながら税関があり、入国管理局の役人が2人居る。2キロほどの川中の対岸はラオス、上流にはムクダハーン近くの岸が見える。川の中程には柵柱がみえ国境線を示している。舟が2、3隻みえ魚を捕っているらしい。タイ側の人間も仲よく出かける。対岸には町がないから、ラオス人は毎日タイ側のケマラートまで買物に来る。その数は1日平均2、30人位に達する。ラオスからは水牛皮が送られてくるが、これはタイ側の商人が一括してバンコクに送る。タイ側の住民は民族的にはラオスの住民と同じであり、互に結婚することもあれば、兄弟・従兄弟姉妹で結ばれていることもしばしばみいだされる。

町から2キロ離れた川岸に170軒ばかりの村がある。どの家もタイの旗を立てている点は国境ぞいの村なら

ではであろう。村長の言からは政治教育がかなり徹底していることが知られる。新聞はもちろんないが、ラジオは20台位あるという。住民はラオタイであり、昔ビエンチャンから来たと伝えられる。そこで早速家族形態の調査を聞く。170軒のうち50軒は独立した核家族、他の50軒は両親と娘夫婦1組からなる大家族、他の70軒は30のヘッド・ナム・カンのグループに分かれている。30組のうち20組は娘夫婦の家族1世帯を含み、他の10組は娘夫婦の家族を2世帯含むというのがだいたいの統計である。水田の所有の形態は40～50ライ2軒、30～40ライ3軒、20～50ライ5軒、10～20ライ90軒、1～10ライ50軒、水田はないが畑地のみが20軒となっている。この村の北にあたるチャスマーン郡には共産ゲリラがひそむと噂される。

スウエイ族がいるというデッドウドムは、県の南の端、ケマラートから200キロの道程である。しかもス



写真4 デッドウドムからブーラベに向うトラック、ニッサン

ウエイ族のいるスユ村は郡役所の所在地から80キロの山道を登ったカンボジア国境附近にある。1日1回のトラック便は40キロ離れたブーラベ村まで入るが、そこから先は歩かねばならない。スウエイ族はスリンの東からシーサケートの南、ウボンの南、さらに国境山脈をこえてカンボジア側の山麓に住む民族で、言語的にはモン・クメール系統に属し、人種的にはインドネシア——ベドイド型の顔付を示すといわれる。スウエイ族をみたさに遠隔の地をいとわず先発することにきめた。郡長から村長宛の紹介状を持ち、今度こそは1人旅である。ブーラベからスユを経てゲーンゲトンを廻りブーラベに戻るまで、通過村ごとに道案内を

頼む。この旅で得た経験は3つ。すなわち僻地にもかかわらず、どこにいてもマラリア予防センターの作業員が入っており、家屋には全部番号がついている。第2に国境線近くの村々は、その大小にかかわらず、立派な校舎をもっているが、内にはいると全く悪い。第3に道路の不便さにひきかえ、無線によるコミュニケーション網が発達しており、各村(タンボン)のガムナンないし校長は毎日きまって郡役所からのニュースを聞き、また送信機をもそなえている。郡長からの紹介状がなければ、宿泊を頼むどころか、すぐに報告されるはめにおちいる。治安状態は案外よくゆきとどいている。

この地域は、スウエイの他、クメール、ラオタイの村がいきまじっている。スユに向う途中、ラオタイの村に遭遇したので、その風習について聞いたが、コンケン、マハーサーラカム、ローイエット、ケマラートのラオタイと同様である。この村は戸数137軒、そのうち90軒は独立した核家族ないし大家族である。残りの47軒は20のヘッド・ナム・カンのグループを形成している。20組のうち13組は両親と娘夫婦1世帯、7組は両親と娘夫婦2世帯がひとつのグループをなす。

ブーラベを朝7時に出て10時間砂地の山道を歩いてスユの村についたのは夕方5時、まったく疲れきって十分間いただきますこともできず翌朝再びブーラベに戻った。男は結婚後妻の両親の家にしばらく住む点はラオタイと同様である。しかしその後、男は自分で家を建て、また土地を探して自分で生計の道をひらく。兄弟姉妹は順次両親のもとをはなれ、最後に残った者が両親とともに住む。それは息子かもしれぬし、娘かもしれぬ。親族名称にかんしては、兄はアイ、姉はサーイ、弟と妹はセームという。父はノ、母はメイである。父の兄はアイ・ノ、父の姉はサーイ・カン・ノ、父の弟はセーム・カン・ノ、父の妹はセーム・カモール・カン・ノであり、母方も同様である。母の兄アイ・カン・メイ、母の姉サーイ・ア・メイ、母の弟セーム・ア・メイ、母の妹セーム・ア・メイである。祖父母はノ・タウとメイ・タウという。

6 ス リ ン

スリンはムーン川の南、カンボジアと接して、ブリラムの東にあり、8郡76村からなる県である。総面積

8,814平方キロのうち耕地面積2,719平方キロ、総人口581,732人のうち農業人口528,474人(91%)、1平方キロあたりの人口は66人で、ブリラムへの移動が目につく。

スリンにもスウエイが居るといので、プーラベを立ち、デッドウドム、ウボンを経て汽車でスリンに向う。トラック、バス、汽車に乗りついで、所要時間15時間、スリンに着いたのは夜9時であった。ウボンからコーラートに到る国境山麓の道路はまだ完成していないから、鉄道以外に交通の便はない。

スリンでは県庁の教育局の役人の案内でスウエイの村とクメールの村をひとつずつみることにした。時間に迫られた強行軍であったが、ジープの便があったため、とにかく予定の場所を訪れえた。スウエイの村は県庁から北へ80キロ上ったグラボー村といい、戸数は170軒である。スウエイの男達は酒好きである。1週間も調査すれば酒代に200バーツ位ははずまねばならないだろう。顔は角ばって、頬骨と顎の骨がよく発達している。言葉は彼らの言葉の話すが、クメール、ラオタイの言葉もしゃべり、標準語もまたうまい。相続についてはラオタイと異なる。5人の子供があれば、末子が両親の世話をすることはスウエイと同じである。両親が水田を2カ所もっていたとすれば、1カ所は末子が受け継ぎ、他の1カ所は他の4人の子供に平等に分ける。もし1カ所しかなかったとすれば、他の4人の子供には分けない。婚姻後は妻の両親としばらく生活を共にするが、適当な時期に自分で家を建てて移る。その際妻の両親が援助することはありうる。親族名称にかんしては自己の兄弟姉妹はスウエイと同じで、兄はアイ、姉はサーイ、弟と妹はセームである。父はヌ、母はメという。父母の兄弟姉妹は父方、母方ともに同じで、叔父はルンク、叔母はパー、伯父はギー、伯母はペという。ルンクとパーはラオタイと同じ言葉である。祖父母はアゴイン、曾祖父母はアゴイン・トゥウッド、子供はゴーン、孫はチャウといい、息子の子も娘の子も同じである。タイ人によればスウエイのあるものは母系だと報告されているが、本当にそういう村があるのだろうか。

訪れたクメールの村は町から2キロほどのところにある。古老に聞いたところをまとめてみるとラオタイにかなり類似している。男は水田を受け継がない。田

は妻の両親からくる。もし3人の娘と2人の息子があれば娘3人は平等に田を譲り受けるが、息子は分けまえにあずからぬ。そして末娘が両親の世話をみるから家屋は末娘のものとなり、両親の田も彼女のものとなる。婚姻後はやはり妻の両親とともにしばらく生活する。ただラオタイと異り、はっきりしている点は、分出したときに田畑を分けるという。とするとヘッド・ナム・カンの例はないことになる。父はアウ、母はメーという。父母の兄弟姉妹は父方、母方の区別なく、それぞれ順にアウ・トム、アウ・トイ、メー・トム、メー・トイという。祖母はターとヤーイ、曾祖母はター・トードとヤイ・トード、その前の世代ではター・ロードとヤイ・ロードという。兄はボンク・プロ、弟はバ・オン・プロ、姉はボンク・スライ、妹はバ・オン・スライである。子供はゴーン、以下世代が下るに従って、チャウ、チャウ・トード、チャウ・ロード、チャウ・リアとなる。

7 おわりに

以上、とりとめの記述になったが、社会的慣習だけについてみてみるとつぎのようである。ガーラシン、サコーンナコーン、ナコーンパノムにかけて住むプータイは父系的色彩が濃厚である。ガーラシンにはプータイ同様タイ系民族としてヨーが住む。この社会組織はラオタイよりはプータイに類似している。ラオタイはチー川の両側をはじめ東北に広く分布している。かれらの社会は、妻方居住制のために、母系的な要素がみいだされる。そして一時的ではあるが、ヘッド・ナム・カンのグループがしばしばみられる。こうしたグループはプータイ、ヨー、クメール、スウエイの間ではなさそうである。クメールの社会的慣習はラオタイに類似しているが、ヘッド・ナム・カンのグループはない。ただし訪れた村はラオ化したクメールなのかもしれない。スウエイはラオタイと異なり、末子が両親の世話をする傾向にある。スウエイといっても場所によりかなり異なるようであり、あるものにはラオ化し、あるものはクメール化しているといわれる。純粋なスウエイとはどんな文化の保持者なのだろうか。はたして母系制の民族といえるのかどうか興味をそそる問題である。

(1966年2月、コンケンにて)